

学会印象記

World Health Summit : Regional Meeting Asia KYOTO 2015

2015年4月13日～14日

京都：国立京都国際会館

会長：湊 長博（京都大学理事・副学長）

福原 俊一（京都大学医学研究科社会医学系専攻長）

高橋 政代

理化学研究所多細胞システム形成研究センター

World Health Summit (WHS)は世界有数の医科大学がM8 Allianceを組織し、健康や医療を取り巻く世界規模の諸問題について、学術的な見地から解決策を政策提言する国際会議で、主に社会医学系の学会という位置づけになるかと思えます。本会議は毎年10月にベルリンで開催され、80ヵ国1,000人以上が集まるそうです。本会議とは別にRegional Meetingが春に行われており、シンガポール、サンパウロに続き京都で開催された3回目のWHS Regional Meetingに呼んでいただき参加してきました。

今回の全体テーマは「医学アカデミアの社会的責任」です。世界の先進国の中でも超高齢社会にいち早く突入した日本で、医学アカデミアにおける「価値とシステムの転換」が求められています。それは医療者だけに閉じたものではなく、広く社会の意識の転換、システムの変革が求められる大きな波です。その波をうまく乗り越えられるのか、非常に難しい舵取りになると思われますが、日本は世界の先頭でその大波に突入することになります。医療アカデミアの責任は非常に重いものになるという確認がなされていたと思います。

学会のプログラムは感染症、プライマリケア、医療ビッグデータ、健康な町づくり、ソーシャルキャピタルと健康長寿、災害後の医療・社会システム、スポーツ、サイバニックシステムなど多岐にわたるシンポジウムで構成されていました。

まちづくりのシンポジウムでは2002年に市長に就任した森雅志氏のもと、コンパクトシティの構築に邁

進している富山市が紹介されました。次世代型路面電車システムを整備し、郊外に散った市民を市街地に呼び戻す政策はOECD (Organisation for Economic Cooperation and Development : 経済協力開発機構)からの評価も高く、コンパクトシティ構想を推進している主要な5都市に選定されたとのことでした。また、コンパクトシティにおける健康増進政策にも独自の視点を持ち様々な政策がなされています。「健康なまち」を実現する社会政策、ビジネスモデルとは何かが議論されました。

感染症については2014年、西アフリカを中心にエボラ出血熱の感染が拡大し社会経済に大きな影響を与えました。こうした感染症に対する治療薬の研究開発が遅れているという問題が明らかとなりましたが、日本で開発された薬が有効である可能性も示されました。パネルディスカッションでは、日本が国際社会と連携しながら、いかに貢献することができるかが議論されました。

再生医療に関しては特別講演1つのみでしたが、再生医療がもたらす健康長寿への貢献、医療費のシステムへの影響など十分に意識されていたと感じました。

特に社会保障における医療費の増大には世界中が喘いでおり、エビデンスに基づいた医療 (EBM) の実践のみでなく、その経済性の評価も注目されるようになってきました。そこで重要なのが様々な医療行為、医療費、薬価などが適正かどうかを評価する医療技術評価 (health technology assessment ; HTA) です。HTAは疫学と計量経済学を学術基盤として行われ、その中に